

# さくらそう通信

VOL.29 2017.3



## 田島ヶ原サクラソウ自生地において守るべき対象は何か？

埼玉大学准教授 荒木祐二

さいたま市文化財保護課から調査専門員を委嘱されて、まもなく一年が過ぎようとしています。埼玉大学名誉教授の清水誠先生からこの依頼を受けた際には、これはまた大きな業務が舞い込んできたと思い、しばらく緊張が続いていました。植物生態学を専門とする私にとって、サクラソウは希少種の代表格であり、“高嶺の花”ともいえる存在でした。そして、その最たる自生地こそが他ならぬ田島ヶ原でした。僣越ながら、今回のさくらそう通信では雑感を交えながら、この一年間でみてきたことを報告させていただきます。タイトルで示したように、「守るべき対象は何か？」を考えながら本稿をお読みいただければ幸いです。「田島ヶ原サクラソウ自生地を保全する」ことの本質を考えた場合、守るべき対象はサクラソウなのでしょうか？田島ヶ原なのでしょうか？それとも保全にかかわる人なのでしょうか？

まずはサクラソウからみていきます（写真 1）。サクラソウが埼玉県の花、さいたま市の花として地域の皆さんに親しまれている存在であることは言をまちません。それなのに絶滅が心配される植物（環境省が定める準絶滅危惧、埼玉県が定める絶滅危惧 I A 類）になっています。田島ヶ原に自生するサクラソウの個体数が、2003 年のピーク

時に比べて半数ほどまで激減している事実もご承知のとおりです。この原因には、競合するノウルシの増加や、地下水位の低下に伴う乾燥化、花粉媒介昆虫の減少などが指摘されています。一年を通じた観察により、サクラソウは3月中旬に芽吹き、3月下旬から5月まで花をつけ、結実後も7月中旬まで展葉していたことを確認しました。



写真1 サクラソウ

花はよく観察されますが、花が終わった後もオギの間隙から漏れた光を利用して、しばらくは光合成を続けていました。その光合成量が地下茎に栄養を貯めるのに十分かどうかは、今後さらに調べる必要がありますが、ノウルシが枯れてから少なくとも1か月以上、サクラソウは光合成をしています。その測定結果を待ちつつも、サクラソウが出芽して開花・結実するまでの成長期に、ノウルシに圧倒される現状を無視できないことから、ノウルシを効果的に除去する方法を検討しているところです(写真2)。ノウルシもサクラソウと同等に絶滅が心配されていますから、ノウルシを除去するといっても最小限に抑える配慮が欠かせません。研究結果の一部をお伝えすると、サクラソウ一個体を中心にして半径40cm内に出現するノウルシをすべて除去すれば、サクラソウ個体を維持・増幅させる効果が期待できることがわかりました(写真3)。詳しい成果は論文にまとめて発表する予定です。機会があればまた改めて説明させていただければと思います。

次に、田島ヶ原について記します(写真4)。田島ヶ原サクラソウ自生地は埼玉県南東部の荒川河川敷に位置し、代表的な湿生の原野植物群落が発達することから国指定特別天然記念物となっています。特別天然記念物は、「天然記念物のうち世界的に又国家的に価値が特に高いもの」とされていることから、田島ヶ原に成立する植物群落がいかに貴重な存在であるかがうかがえます。また、この地には首都圏の大都市近郊に位置するにもかかわらず原生に近いかたちで湿生植物群落が残存するという付加価値を有し、植物資源や研究材料のみならず、観光資源や地域のシンボルとなっていることも高く評価されています。この地では約250種の植物が確認され、そのうち約30種の植物は絶滅が心配されるとの報告があります。しかし、季節変化に伴う植物の出現がどのように推移するかははっきりわかっていません。そこで、2016年4月から10月までの間に1週間~1ヶ月の

間隔で植生調査を行いました。調査対象地はA~E区内の散策路から5m以上内側としました。夏になるとオギ・ヨシに覆われる自生地の内部です。その結果について以下に報告します。



写真2 ノウルシに覆われるサクラソウ



写真3 ノウルシ除去実験のようす



写真4 田島ヶ原サクラソウ自生地

まず、一般的に日本の季節は春夏秋冬からなる四季といわれますが、出現する植物の組み合わせを勘案すると、五季目として「早春期」が加わります。田島ヶ原の場合、3月～5月上旬までが早春期、そこから6月上旬までが春期、7月下旬までが夏期、それ以降で霜が降りる10月下旬までが秋期となりました。早春期には、サクラソウやノウルシ、ノカラマツ、ハナムグラ、スギナなどが一斉に芽吹きます（写真5）。



写真5 早春期の芽吹き

アマナやジロボウエンゴサク、ノビルも散在し、この3種は早春期に偏って出現が確認されることから、早春期を標徴する植物といえます。春期になると、ノウルシが枯れ始めてスイバやミゾイチゴツナギも徐々にみられなくなっていきます。それらと置き換わるように、オギやヨシの急激な成長がみられ、ツルマメやノブドウなどのつる性植物が繁茂しだすのがこの時期の特徴です。ちなみに場所によりますが、オギとヨシの出現割合は、全体的に5：2くらいでオギの方が多くみられます。また、近年では早春期から春期にかけてノウルシが優勢に繁茂するようになり、サクラソウを被陰しています。そのノウルシは5月上旬のゴールデンウィークを過ぎると衰え始め、5月下旬にはほとんど枯れてしまいます。

6月以降の夏期にはノウルシはすっかりみられなくなりますが、サクラソウはオギやノカラマツの隙間から注ぐ光を頼りに、地表面でまだ葉を

開いて光合成をしています（写真6）。しかし、場所によってはいつの間にかコバギボウシが展葉して地表を覆うようになり、サクラソウを著しく被陰する様子が確認されました（写真7）。



写真6 夏期に地表面で展葉するサクラソウ



写真7 コバギボウシの繁茂

また、スズメウリやカラスウリ、ツククサなどが夏期に限定して出現していました。秋期になるとオギが枯れ始め、サクラソウもまったくみられなくなります。視線の高さにヤブガラシやヒルガオ、ヤブマメ、ツルマメ、ノブドウといったつる性植物が、枯れかけたオギに巻き付く様子が確認されます。地表に目を向けると、コバギボウシが目立つことに加え、秋期に偏在するツルボが淡いピンクの花を咲かせていました。

このように、田島ヶ原サクラソウ自生地の内側では、多様な植物が季節に応じて入れ替わる様子

が確認されました。ただし、この記載はたった一年の結果を示したにすぎず、一種類ごとの個体数を調べたわけでもありません。この地を一つの生態系ととらえて、長期的にモニタリングすることで今後明らかにされることが多いでしょう。もしかしたら、サクラソウと同様に個体数が減ってきている植物がいるかもしれません。サクラソウの保全を最優先とした場合、はからずも別種の居場所を奪ってしまうかもしれません。そう考えると、この地での保全のあり方についていま一度、原点に立ち返って慎重に考える必要があるように思います。

最後に人とのかかわりについて考えてみます。田島ケ原サクラソウ自生地は、かつては萱取場として利用されていました。生い茂ったオギ・ヨシを秋口に刈り込んだり、火入れをしたりすることで翌春のオギ・ヨシの生育をうながす工夫を重ねてきました。それが長年繰り返されることで、いつしか地域の文化として定着するようになりました。こうした履歴から、田島ケ原サクラソウ自生地は、人が管理することで維持される生態系といえます。国指定特別天然記念物に人の手を加えてもよいのか、という批判もあるかもしれません。しかし、長年にわたり人工的に管理されてきた里地里山が放棄され、生態系の劣化を引き起こした事例が全国各地で見受けられます。当然ながら、むやみやたらに手を加えることはできませんが、科学的な根拠に基づいた適切な方法で管理していく必要があります。例えば、自生地内にはセイタカアワダチソウやブタクサなどの外来種が毎年数多く侵入しています。最近ではスミレによく似たアメリカスミレサイシンという北アメリカ原産の外来種も、駐車場側に普通にみられるようになりました。これらは在来種の居場所を奪う危険性が

高いことから、1本残らず取り除く必要があります。一方で、ノウルシについては先に述べたとおり、絶滅が心配される在来種として最小限の手入れにとどめたいところです。まとめると、田島ケ原サクラソウ自生地における保全の方針は、生態系の急激な変化を抑えるために、人の手で積極的に管理しつつも、その手入れは最小限にとどめ、となるでしょうか。その根拠を示すための研究にこれから腰を据えて取り組もうと考えているところです。

本稿をお読みいただいた皆様は、きっと田島ケ原サクラソウ自生地への関心が高いのだらうと思います。様々な事象に関心を示すことが保全の第一歩となるわけですし、より積極的にかかわりたい方は、サクラソウを守るボランティア活動に参加されるでしょう。田島ケ原サクラソウ自生地は多くの人の支えがあって維持されています。猛暑の炎天下で、作業員さんの皆さんが大汗をかきながら、何百本、何千本の外来種を駆除する姿には頭の下がる思いです。さいたま市教育委員会文化財保護課の皆さんも試行錯誤を繰り返しながら、保全に向けたより良い方策を探ろうとしています。サクラソウを守りたい、田島ケ原を守りたい、そう願って行動する人たちが「田島ケ原サクラソウ自生地の保全」の主役であって欲しいと切に願います。タイトルで示した「守るべき対象が何か？」については、皆さんとともにこれからも考えていきたいと思います。各々ができることを考え、積極的にかかわることで、この地は持続的に保全されていくものと信じています。私も微力ながら、研究者として自分にできることを探り、保全活動の一助となれるよう尽力してまいります。今後ともよろしく願います。